

曹洞宗では、お釈迦さまが人間として尊い方であるので、ご本尊さまとしてお祀りまつをしております。何か超ちょう人じん的な能力を持った方だからということでお祀りまつをしている訳ではありません。

お釈迦さまは、この世の苦しみに遭あい、悩み、そしてその苦しみから離れる術すべに気付き、実践されたのです。これがいわゆる「悟りを開かれた」という事です。

何かの真理に気付いたとしても、それを実践して証明し続けるのは難しい事です。

例えば、法律を知っていても守っていくのは難しい事です。よく「守る事は簡単だが守らないだけだ」と嘯うそぶく人がいますが、それは間違いです。守らない人は、実は守れない人なのです。守れるなら守る。守れないなら、守る努力をすべきなのです。心でどう思っている、やっている事が真実なのです。

私たち曹洞宗の坐禅も、お釈迦さまが実践された修行の一つです。坐禅の姿はお釈迦さまの姿。悟られたお釈迦さまも実践された坐禅であるなら、坐禅の姿は仏さまなのです。悟るための手段ではなく、悟った人そのものなのです。

ただただ只ひたすら坐るといこころう『心』の姿勢が、曹洞宗の坐禅なのです。

しかし、坐禅に慣れるまで辛いと感じる人も多くいると思います。修行道場おに於いて大勢で皆とともに一緒に坐禅を組むのは、一人だと怠けたり逃げたりしてしまうという事を防ぐためでもあるのです。

お釈迦さまは独ひとりで悟り、やがてお釈迦さまのもとに多くの弟子が集まり大きな教団となりました。大きな集団となっても一人一人で行う修行の大切さを説かれました。

『スッタニパータ』というお経の中に、  
「ほうゆう朋友・あわ親友に憐れみをかけ、心おのりがほだされると、己したが利を失う。親しみにはこの恐れのあることを観察して、さい犀の角のように ただ独り歩め」と、ひと独り修行する事をもすす勧めています。

たとえ皆といっても、まわりに執着せずに独り行く『心』の姿勢が大切なのでしょう。